

令和 8 年度病害虫発生予報 第 2 号（5 月予報）

令和 8 年 4 月 2 8 日
青森県病害虫防除所

【概 要】

- 水 稲：細菌性の苗立枯病は多い、イネドロオイムシはやや多い、ばか苗病は平年並、フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病はやや少ない、イネミズゾウムシは少ないと予想される。
- 小 麦：うどんこ病はやや少ないと予想される。
- りんご：モニリア病、腐らん病、リンゴコカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキは平年並、黒星病はやや少ない、クワコナカイガラムシは少ない、リンゴハダニはやや多いと予想される。
- 特産果樹：ぶどうの灰色かび病は平年並、おうとうの灰星病は津軽地域でやや少なく、県南地域でやや多い、もものせん孔細菌病は少ないと予想される。
- 野 菜：にんにくの春腐病は平年並、さび病はやや少ないと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (フザリウム・ピシウム属菌)	県内全域	—	やや少ない	①向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想される(－)。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	—	多い	①前年の発生量は平年より多かった(+) ②向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想される(+)
ばか苗病	県内全域	—	平年並	①前年の本田発生量は平年並であった(±)。
イネミズゾウムシ	県内全域	—	少ない	①前年の発生量は平年より少なかった(－)。
イネドロオイムシ	県内全域	—	やや多い	①前年の発生量は平年よりやや多かった(+)

(2) 小 麦

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
うどんこ病	県内全域	—	やや少ない	① 4 月中旬の発生量は平年より少ない(－)。 ②向こう 1 か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される (±)。

(3) りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (実腐れ)	県内全域	早い	平年並	①開花日は平年より早いと予想される。 ②前年の実腐れの発生量は平年並である(±)。 ③向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
腐らん病	県内全域	—	平年並	①4月の発生量は平年並である(±)。
黒星病	県内全域	やや早い	やや少ない	①展葉日は平年よりやや早かった。 ②前年の発生量は平年よりやや少なかった(-)。 ③向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
リンゴコカクモン ハマキ	県内全域	やや早い (越冬巣からの 脱出)	平年並	①向こう1か月の気温は高いと予想される。 ②越冬幼虫量は平年並である(±)。
ミダレカクモンハ マキ	県内全域	—	平年並	①越冬卵塊量は平年並である(±)。
クワコナカイガラ ムシ	県内全域	やや早い (幼虫の移動)	少ない	①4月上中旬の気温は平年より高い。 ②向こう1か月の気温は高いと予想される。 ③越冬卵量は平年より少ない(-)。
リンゴハダニ	県内全域	—	やや多い	①越冬卵量は平年よりやや多かった(+)

(4) 特産果樹

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 灰色かび病	県内全域	平年並	平年並	①向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。
(おうとう) 灰星病 (花腐れ)	津軽地域 県南地域	早い	やや少ない やや多い	①開花は平年より早いと予想される。 ②前年の実腐れの発生量は津軽地域で平年よりやや少なく(-)、県南地域でやや多かった(+) ③向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(もも) せん孔細菌病 (春型枝病斑)	県内全域	—	少ない	①前年の発生量は平年より少なかった(-)。 ②向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。

(5) 野菜

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(にんにく) 春腐病	県内全域	—	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(にんにく) さび病	県内全域	—	やや少ない	①4月中旬の発生量は平年より少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)

※ 予報の根拠内の気象情報は、4月23日発表の1か月予報による。

発生量に対し、(+): 多くなる要因、(-): 少くなる要因、(±): 多少に大きく影響しない要因

2 防除のポイント

薬剤名の後に記載している括弧内の数字・記号は、有効成分の作用機構分類RACコードを示す。なお、混合剤等、複数の有効成分を含む剤はコードをカンマで区切って併記した。FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクroppライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ（<https://www.crop lifejapan.org/activity/mechanism.html>）を参照。

(1) 水 稲

《5月の防除作業》

1 半旬	2 半旬	3 半旬	4 半旬	5 半旬	6 半旬	6 月上旬	
育苗後期			/	田植期		/	本田初期

・ 防除時期



・ 防除対象病害虫

(育苗箱施用/側条施用)

△イネミズゾウムシ

△イネドロオイムシ

☆いもち病

(水面施用)

▲イネミズゾウムシ

注：△印：前年までの発生状況に応じて防除する。
▲印：田植後の発生状況に応じて防除する。
☆印：抵抗性の弱い品種や常発地で防除する。
防除農薬は農作物病害虫防除指針等を参照するか、指導機関に問い合わせる。

【 苗立枯病 】

ア 苗立枯病共通

- ① 苗立枯病は、極端な温度管理や徒長軟弱の時に発生しやすいので、適正な温度管理に努める。
- ② 健苗を育てるためには生育段階ごとの適温があり、出芽期から1.5葉期までは30℃前後に、1.5～3葉期までは25℃前後に、3葉期以降は20℃前後で管理し、夜間は出芽期以降5℃以下にならないようにする。
また、換気に努めるとともに、かん水は乾き具合を見て行い、過湿や過乾燥にならないように注意する。

イ フザリウム・ピシウム属菌

- ① 育苗中に極端な低温に遭遇すると苗の抵抗力が弱まるため、フザリウム属菌、ピシウム属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。遅霜が予想される場合には保温資材などを準備し、極端な低温に備える。

ウ リゾープス・リゾクトニア属菌

- ① 保温資材による被覆が長時間にわたり高温、過湿になると、リゾープス、リゾクトニア属菌が発生しやすくなる。
- ② 被覆期間が長引き、覆土にリゾープス属菌（クモの巣状のカビ）が見られる場合は、日中は被覆資材を除去して湿度を下げ、夜間は被覆して保温に努める。

エ もみ枯細菌病、苗立枯細菌病

- ① 育苗中の高温、過かん水により発病が助長されるので、換気に努めるとともに、かん水は乾き具合を見ながら行う。
- ② 発病苗（箱）は感染源になるので、育苗箱ごとに処分する。

オ ごま葉枯病

- ① 高温、過湿は発病を助長するので、十分注意する。
- ② 苗の発病程度が高まるほど移植後の生育が劣るので、発病の多い育苗箱の苗は移植しない。

【 ばか苗病 】

- ① 自家採種や温湯消毒を行っている一部の農家で発生が目立っている。
- ② 発病苗（徒長苗、わい小苗など）は見つけ次第抜き取り、本田に持ち込まない。
- ③ 発生程度の高い育苗箱の苗は移植しない。
- ④ 温湯消毒や生物農薬による種子消毒は、化学合成農薬に比べて防除効果が不安定である。移植後に発病する場合があるので、本田をよく観察し、発病株を見つけたら株ごと抜き取り、土中に埋めるなど適切に処分する。
- ⑤ プロクロラズ剤の効力の低下が認められた場合は、使用を中止する。

【 移植時におけるいもち病（葉いもち）の防除 】

- ① いもち病抵抗性「中」以下の品種を作付する場合、箱施用剤や水和剤による予防防除を行う。
- ② 補植用の取置苗は放置すると葉いもちの発生源となるので、補植作業が終わり次第、土中に埋めるなど適切に処分する。
- ③ 地域が一带となって、薬剤耐性いもち病菌への対策を実施する。

【薬剤耐性いもち病菌への対策】

Q○I 剤耐性菌が東北地域でも確認されている。

本県における耐性菌の発生を未然に防ぐため、地域一体となって以下の対策を実施すること。

ア Q○I 剤は1年ごとに作用機構の異なる薬剤とローテーションで使用するとともに、育苗期から本田期を通じて年1回以内の使用に止める。

① これらの成分を含む本田散布剤は、多発時の使用を避ける。

② オリブライト剤（F:11）、アミスター剤（F:11）は同一系統剤とみなす。

イ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほ及びその周辺ではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。

ウ 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、種子更新、塩水選及び種子消毒を行う。購入種子（他県産稲、飼料用稲を含む）でも必ず種子消毒を行う。

エ Q○I 剤を使用した水田において、いもち病（葉いもち、穂いもち）が多発生した場合には、罹病葉（穂）を採取し、病害虫防除所又は関係指導機関に連絡するとともに、他系統薬剤で追加防除を行う。

【 イネミズゾウムシ 】

- ① 移植後に発生程度に応じて防除する。ただし、例年発生の多い水田や他害虫が発生して同時防除を必要とする場合には、育苗箱施用、側条施用又は粒剤の水面施用を行う。
- ② 移植時の防除を実施しない水田では、5月6半旬又は6月1～2半旬に食害株率又は食害度が下表の基準を超えた場合に、水面施用剤による防除を行う。水面施用剤は、止水期間を7日間とし、落水・かけ流しをしない。その間の入水は水尻を止めたままで行う。

《防除判断の目安》

調査時期	5月6半旬	6月1～2半旬
食害株率	62%	82%

注) 食害調査は、畦畔から中央に向かって2mぐらい入った地点から1筆当たり2か所について計50株以上を調査する。

【 イネドロオイムシ 】

- ① 前年多発生した水田では、育苗箱施用剤でイネミズゾウムシと同時防除するか、成虫の食害葉や産卵の状況を見ながら適期に水面施用剤若しくは茎葉散布剤で防除を行う。

- ② カーバメート剤 (I:1A)、有機リン剤 (I:1B)、フェニルピラゾール剤 (I:2B) の抵抗性発現あるいは感受性低下が認められる地域があることから、可能な限り1年若しくは2年ごとに作用機構の異なる箱施用剤をローテーションで使用する。

【 イネヒメハモグリバエ 】

- ① 成虫は水面に垂れている葉や浮き葉に産卵する。産卵に適した葉が多いと被害を助長する傾向があるため注意する。
- ② 水田内をよく観察し、被害がみられたら茎葉散布剤を散布する。なお、本虫に登録のある箱施用剤を使用した場合には、防除は不要である。

育苗後に他作物を栽培する場合の注意点

- ① 箱施用剤をは種時～育苗期間に処理する場合は、箱施用した農薬が置床にこぼれ落ちないように、また、かん水とともに置床に浸透しないように、プール育苗にするか、置床にビニルなどの無孔シートを敷く。
- ② 移植時に箱施用剤を処理する場合は、ハウス外で行う。ハウス内で行う場合は、ビニルなどの無孔シート等の上で行い、置床に農薬がこぼれ落ちないようにする。

(2) 小 麦

【 うどんこ病 】

- ① うどんこ病は、発生初期と7～10日後の2回、薬剤散布を行う。特にネバリゴシはうどんこ病に弱いので、蔓延させないように発生状況に注意する。
- ② うどんこ病の薬剤散布を1回とした場合は、止葉直下葉での発生直後に下記の薬剤を散布すると効果的に抑えることができ、収量・品質低下に対する影響も小さくなる。

【 赤かび病 】

- ① 赤かび病が産生するカビ毒に汚染されると出荷流通停止となることから、本病に対する防除を徹底する。
- ② 赤かび病は出穂期～乳熟期にかけて降雨や濃霧が続くと発生しやすいので、開花始め～開花期に1回、その7日後に1回散布する。赤かび病の発生源の一つである紅色雪腐病の発生が認められたほ場では薬剤防除を徹底する。
- ③ ベンゾイミダゾール系、QoI剤は、うどんこ病及び赤かび病に対し耐性菌が出やすいので連用しない。特に紅色雪腐病の発生したほ場ではベンゾイミダゾール系剤は使用しない。

系統別防除薬剤一覧

薬剤系統名 (FRACコード)	薬 剤 名
DMI 剤 (3)	シルバキュアフロアブル、トリフミン水和剤、ワークアップフロアブル
QoI 剤 (11)	ストロビーフロアブル
ベンゾイミダゾール系 (1)	トップジンM水和剤

(3) りんご

【 モニリア病 】

- ① 「開花直前」にSDHI剤 (フルーツセイバー、ロンセラーフロアブル、カナメフロアブル、パレード15フロアブル) を散布する。
- ② 葉腐れ、花腐れを放置しておく、実腐れにつながる、見つけ次第、摘み取り、適切に処分する。
- ③ 実腐れや株腐れはそのまま放置すると地表に自然に落下して越冬し、翌年の伝染源になるので、園内を見回り、見つけ次第摘み取って、土中深く (10cm以上) に埋めるなど必ず適切に処分する。

【 腐らん病 】

- ① 枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。

② 胴腐らんは、再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。なお、処置方法については、青森県産業技術センターのYoutube公式チャンネルに掲載している。

(<https://www.youtube.com/@aitcofficial/videos>)

ア トップジンMオイルペースト、フランカットスプレー又はバッチレートをを使う場合は、薬剤ごとに適切な方法で処置を行う。

イ 泥巻きを行う場合は、水を加えて団子状にこねた泥を病斑部よりも5～6cm広めに、3～5cmの厚さに貼り付ける。さらにその上をビニール又はポリエチレンフィルムなどで被覆し、内部の泥の乾燥を防ぐようにして約1年間そのままにしておく。病斑部を軽く削り取ってから泥巻きを行うと一層効果的である。なお、火山灰土壌を使用する場合は、容積比で土が9に対してベントナイト（土壌改良資材の一種）1を加えてこねると粘着性が増し、泥巻き作業の効率が良くなる。泥を作るには、土とベントナイトをよく混ぜてから水を入れて練る。この際、ベントナイトは量が多すぎると樹皮が腐敗し、治ゆ効果も低下するので、加える量を誤らないようにする。

ウ 胴腐らんの発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採する。

【 黒星病 】

① 「ふじの展葉1週間後頃」から「ふじの落花20日後頃」までは防除上最も重要な時期なので、薬剤散布は10日間隔を遵守し、散布ムラができないように基準量を丁寧に散布する。降雨とともに子のう胞子が飛散するので、散布予定日に降雨が見込まれる場合は、事前散布に徹する。

② 「開花直前」にSDHI剤（フルーツセイバー、ロンセラーフロアブル、カナメフロアブル、パレード15フロアブル）を散布する。

③ 「落花直後」にミギワ20フロアブルと、デランフロアブル、チウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）、マンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）のいずれかを散布する。開花期間が長引いた時は、花が残っていても散布する。

④ 「落花10日後頃」にユニックス顆粒水和剤47と、チウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）又はマンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）を散布する。

⑤ 「落花20日後頃」にデランフロアブル、チウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）、マンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）のいずれかを散布する。

⑥ SDHI剤、ミギワ20フロアブル、ユニックス顆粒水和剤47は薬剤耐性発達の懸念があるため、年1回の使用とする。

【 ミダレカクモンハマキ 】

① 発生の多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にロムダンフロアブル、BT剤（ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDF）のいずれかを選択し、同一薬剤を連続して使用する。

② 「落花10日後頃」に発生が多い場合は、エルサン水和剤40を散布する。

【 リンゴコカクモンハマキ 】

① 越冬世代幼虫が多い園地では、「落花直後」にアタブロンSCを散布する。

【 クワコナカイガラムシ 】

① 前年に果実被害がみられた園地で、「展葉1週間後頃」にアプロードフロアブルを使用しなかった場合には、「落花10日後頃」と「落花20日後頃」にエルサン水和剤40、ダイアジノン水和剤34、スミチオン水和剤40のいずれかの有機リン剤による胴木洗いを手散布で実施する。

【 キンモンホソガ 】

① 開花期から落花直後頃の間根ばやを切り取る。

【 ハダニ類 】

① 開花期にリンゴハダニの発生が多い園地では、「落花直後」にバロックフロアブルを使用する。

② 防除剤は「落花直後」以降、発生状況に応じて使用する。

③ コロマイト乳剤は6月下旬まで、オマイト水和剤は7月下旬までの使用を避ける。

【 コンフューザーRの設置 】

① モモシンクイガやリンゴコカクモンハマキは通常の殺虫剤だけでは防除が困難なため、コンフューザーRを

5月中旬に設置する。

- ② 1園地でも効果はあるが、広い面積で設置するほど効果が高まるので、地域ぐるみで取り組み、発生密度の低下を図る。設置点を多く取ることが重要なため、ディスペンサーは園地全体に均一に取り付け、まとめて1か所に取り付けることはしない。園地の周辺部は性フェロモン濃度が低下しやすいため、多めに取り付ける。また、性フェロモンは空気よりも重いいため、園地に傾斜がある場合には傾斜の上部に多めに取り付ける。
- ③ コンフューザーRの具体的な設置方法については、農なび青森に掲載している。
(<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8495>)

参考表 りんごに使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
フルーツセイバー	ベンチオピラド	7	SDHI剤
ロンセラーフロアブル	フルキサピロキサド	7	
カナメフロアブル	インピルフルキサム	7	
パレード15フロアブル	ピラジフルミド	7	
トップジンMオイルペースト	チオファネートメチル	1	
フランカッツスプレー	ポリオキシシンD亜鉛塩	19	
バッチレート	有機銅	M01	
ミギワ20フロアブル	イブフルフェノキン	52	
デランフロアブル	ジチアノン	M9	
チオノックフロアブル	チウラム	M03	チウラム剤
トレノックスフロアブル	チウラム	M03	
ジマンダイセン水和剤	マンゼブ	M03	マンゼブ剤
ペンコゼブ水和剤	マンゼブ	M03	
ユニックス顆粒水和剤47	シプロジニル	9	

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
ロムダンフロアブル	テブフェノジド	18	IGR剤
アタブロンSC	クロルフルアズロン	15	
ファイブスター顆粒水和剤	BT(生菌)	11A	BT剤
バイオマックスDF	BT(生菌)	11A	
エルサン水和剤40	PAP	1B	有機リン剤
ダイアジノン水和剤34	ダイアジノン	1B	
スミチオン水和剤40	MEP	1B	
バロックフロアブル	エトキサゾール	10B	
コンフューザーR	オリフルア トートリルア ピーチフルア	-	

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロープライフジャパン(旧農薬工業会)ホームページ(<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>)を参照。

(4) 特産果樹

○ ぶどう

【灰色かび病】

- ① 新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の通風を良くする。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にならないようにする。
- ② 発病葉、発病花穂及び発病枝はできるだけ早く取り除き土中に深く埋める。
- ③ 新梢伸長期に低温多湿の気象条件が予想される場合は、多発生が懸念されるので、「スチューベン」では「新

梢伸長期(約20cm)」に、「シャインマスカット」では「新梢伸長期(約15cm、約30cm)」にポリオキシシリンAL水和剤、チウラム剤(チオノックフロアブル、トレノックフロアブル)、DMI剤(インダーフロアブル、オンリーワンフロアブル、ベランティーフロアブル)のいずれかを選択し、新梢での被害を防止する。DMI剤(インダーフロアブル、オンリーワンフロアブル、ベランティーフロアブル)は薬剤耐性発達の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。

【 褐斑病 】

- ① 「キャンベル・アーリー」で発生の多い園地では、「新梢伸長期(約20cm)」にチウラム剤(チオノックフロアブル、トレノックフロアブル)又はDMI剤(インダーフロアブル、オンリーワンフロアブル)、「開花10日前頃」にオーソサイド水和剤80又はチウラム剤(チオノックフロアブル、トレノックフロアブル)を選択する。

【 ベと病 】

- ① 排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長くたまらないようにする。
- ② 「スチューベン」で発生の多い園地では、「新梢伸長期(約20cm)」にジマンダイセン水和剤又はチウラム剤(チオノックフロアブル、トレノックフロアブル)、「開花10日前頃」にアリエッティC水和剤、キノンドー水和剤40、チウラム剤(チオノックフロアブル、トレノックフロアブル)のいずれかを選択する。
- ③ 「シャインマスカット」で発生の多い園地では、「新梢伸長期(約15cm、約30cm)」にジマンダイセン水和剤又はチウラム剤(チオノックフロアブル、トレノックフロアブル)を選択する。

○ おうとう

【 灰星病 】

- ① 花腐れや実腐れは見つけ次第、摘み取って処分する。
- ② 花腐れ防止のため、「満開5日後頃」の薬剤散布は時期が遅れないように適期に行う。また、雨の多い場合は晴れ間を見て散布する。
- ③ DMI剤(オーシャイン水和剤、アンビルフロアブル、ラリー水和剤、オンリーワンフロアブル、インダーフロアブル)は薬剤耐性発達の懸念があるので、連続使用しない。
- ④ ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤及び同系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は連続使用しない。

【 オウトウショウジョウバエ 】

- ① 「満開35日後頃」の比較的早い時期から加害が始まる場合があるので、発生状況に応じてテルスターフロアブル又はスピノシン剤(ディアナWDG、デリゲートWDG)を散布する。

【 カメムシ類 】

- ① 5月末頃から8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つければ次第つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。
- ② 「満開12日後頃」と「満開25日後頃」に発生がみられた場合、オウトウハマダラミバエ対策でアディオフロアブルを使用すると、防除剤は必要ない。
- ③ 「満開25日後頃」に発生がみられた場合、ダイアジノン水和剤34の代わりにジノテフラン剤(スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤)又はダントツ水溶剤を使用する。
- ④ 「満開35日後頃」に発生がみられた場合、テルスターフロアブルを選択する。

○ もも

【 せん孔細菌病 】

- ① 風を強く受ける地帯で多発するので、防風網の設置などの耕種的対策を徹底する。
- ② 春型枝病斑は葉や果実への伝染源となるので、見つけ次第、枝ごと切り取って処分する。
- ③ 前年果実被害が多かった園地では、果実への感染を防ぐため有袋栽培とする。仕上げ摘果をできるだけ早く終わらせ、速やかに袋かけを行う。
- ④ クプロシールドは葉に薬害を生じるおそれがあるので、薬害軽減のためクレフノンを必ず加用する。散布後に大雨があるとクレフノンが流されるので注意する。
- ⑤ マイコシールドとスターナ水和剤は薬剤耐性の懸念があるので、それぞれの薬剤を連続使用しない。

【カメムシ類】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。

【コンフューザーRの設置】

- ① 5月中旬に100本/10a設置する。
② 対象害虫はモモシクイガ及びナシヒメシクイである。

○ 西洋なし

【輪紋病】

- ① 伝染源となる枝幹部のいぼ病斑を孢子飛散の始まる5月下旬までに削り取り、トップジンMペーストを塗布する。
② 幼果期は最も感染しやすいので、10日間隔の薬剤散布を守る。散布予定日に降雨が予想される場合には、事前散布する。

【コンフューザーRの設置】

- ① 5月中旬に100本/10a設置する。
② 対象害虫はモモシクイガ、ナシヒメシクイ、ミダレカクモンハマキ、リンゴコカクモンハマキ及びリンゴモンハマキである。

参考表 特産果樹に使用する農薬の作用機構分類
<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
ポリオキシシリンAL水和剤	ポリオキシシリン複合体	19	抗生物質剤
チオノックフロアブル	チウラム	M03	チウラム剤
トレノックスフロアブル	チウラム	M03	
インダーフロアブル	フェンブコナゾール	3	DMI剤
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	
ベランティーフロアブル	メフェントリフルコナゾール	3	
オーソサイド水和剤80	キャプタン	M04	
ジマンダイセン水和剤	マンゼブ	M03	
アリエッティC水和剤	キャプタン	M04	
	ホセチル	P07	
キノンドー水和剤40	有機銅	M01	
オーシャイン水和剤	オキシボコナゾールフマル酸塩	3	DMI剤
アンビルフロアブル	ヘキサコナゾール	3	
ラリー水和剤	マイクロブタニル	3	
アミスター10フロアブル	アゾキシストロビン	11	ストロビルリン単剤
ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ	11	
ナリアWDG	ピラクロストロビン	11	ストロビルリン混合剤
	ボスカリド	7	
マイコシールド	オキシテトラサイクリン	41	抗生物質剤
スターナ水和剤	オキシリニック酸	31	
クプロシールド	塩基性硫酸銅	M01	
トップジンMペースト	チオファネートメチル	1	

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
テルスターフロアブル	ビフェントリン	3 A	ピレスロイド剤
ディアナWDG	スピネトラム	5	スピノシン剤
デリゲートWDG	スピネトラム	5	
アディオフロアブル	ペルメトリン	3 A	ピレスロイド剤
ダイアジノン水和剤34	ダイアジノン	1 B	有機リン剤
スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン	4 A	ネコニコチノイド剤
アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン	4 A	
ダントツ水溶剤	クロチアニジン	4 A	
コンフューザーR	オリフルア トートリルア ピーチフルア	—	

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン (旧農薬工業会) ホームページ (<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>) を参照。

(5) 野菜

○ にんにく

【春腐病】

- ① 降雨や曇天の日が続く場合に発生が増加し、生育が旺盛なほ場で多発しやすい。
- ② 多発してからの薬剤散布では防除効果が期待できないことから予防散布を基本とする。天気予報により降雨が続くと予想される場合、降雨前に薬剤を散布すると効果的である。
- ③ ほ場をよく観察し、萎凋症状を示すなど腐敗が進行している株が認められた場合は、見つけ次第抜き取り処分する。伝染源の除去に努めることで、周囲への感染を防止する。

【さび病】

- ① 初発時期が早く、気温が高く推移すると多発する傾向がある。
- ② 下表に示した防除薬剤の効果の持続期間（散布間隔）を参考に防除を実施する。発生が多い場合は効果持続期間より散布間隔を短くする。
- ③ 防除効果を安定的に発揮させるためには、散布量を十分確保し、下葉までまんべんなく薬液がかかるように散布することが重要である。

《にんにくさび病防除薬剤の散布間隔の目安》

薬剤名	有効成分	FRAC コード	系統名	さび病蔓延期における効果の持続期間		
				21日 程度	10～14日 程度	7～10日 程度
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	11	QoI 剤	○		
アミスターオプティフロアブル	アゾキシストロビン	11	QoI 剤	○		
	T P N	M05	クロロニトリル剤			
シグナムWDG	ピラクロストロビン	11	QoI 剤	○		
	ボスカリド	7	SDHI 剤			
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	DMI 剤	○		
カナメフロアブル	インピルフルキサム	7	SDHI 剤	○		
ラリー乳剤	マイクロブタニル	3	DMI 剤		○	
ストロビーフロアブル	クレソキシムメチル	11	QoI 剤		○ (10日程度)	
テーク水和剤	シメコナゾール	3	DMI 剤			○
	マンゼブ	M03	ジチオカーバメイト剤			

FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン (旧農薬工業会) ホームページ (<https://www.croplifejapan.org/activity/mechanism.html>) を参照。

★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

農林水産省「農薬情報」 https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/
農林水産省「農薬登録情報提供システム」 <https://pesticide.maff.go.jp/>

☆農薬散布時は農薬の飛散防止対策をしてください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植物、街路樹並びに住宅地に近接する農地（市民農園や家庭菜園を含む）及び森林等において、農薬の飛散を原因とする住民や子ども等の健康被害が生じないように、飛散防止対策を徹底しましょう。農薬散布に当たっては、事前に周辺住民に対して、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者の連絡先等を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮しましょう。

☆クロルピクリン剤の安全使用について☆

本県では、ながいもやごぼう等の根菜類の作付けが多く、土壌病害を防除するため、クロルピクリンが使用されていますが、その使用に当たっては次の事項を遵守しましょう。

<使用上の注意>

- 処理作業は、気温・地温の低い午前中か夕方に行う。
- 使用時は、防護マスクや防護メガネ等を着用する。
- 揮散したガスは低地にたまりやすいため、農地近郊の低位置に人家や畜舎等がある場合は使用しない。
- 降雨等により地下水や河川等に流入するおそれがある場合は使用しない。
- 人家や畜舎等に近接する農地ででの使用を避けるとともに、人家や畜舎等の近郊では、それらが風下になる場合は作業を一時中断する。
- 使用後は、直ちにポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上の厚めのもの、難透過性のもの）で被覆するなど、揮散防止のために必要な措置を講じる。
- 使用済みの空き缶等は、周囲に影響を及ぼさないよう適切に処分する。
- トラック等で薬剤を運搬する場合は、薬剤が脱落しないよう確実に固定して積載する。
- 施錠可能な冷暗所に保管する。

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6
E-mail : byogaichu@pref.aomori.lg.jp

※当情報は、青森県農業・就農情報サイト「農ナビ青森」
(<https://www.nounavi-aomori.jp/>) に掲載しています。